

第八調

「スポタ」の大晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十句を立てて主日の讚頌を歌ふ、第八調。

句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。
ハリストスよ、我等晩の歌と靈智の務とを爾に獻る、爾復活を以て我等を救ひ給ひしに因る。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

主よ、主よ、我等を爾の顔より退くる毋れ、復活を以て我等を救ひ給へ。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

聖なるシオン、諸教會の母、神の住所よ、慶べ、爾は始めて復活に由りて罪の赦を受けられたらばなり。

又讚頌、アナトリーの作。同調。

句、願はくは爾の耳は我が祷の聲を聴き納れん。

世の前に神父より生れ、末の時に婚姻に與らざる童貞女より甘じて身を取りし言は十字架に釘せられ、死を忍びて、己の復活を以て昔殺されし人を救ひ給へり。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

ハリストスよ、我等は爾の死よりの復活を讚榮す。爾は此を以てアダムアダムの族を地獄の苛虐より釋き、神として世界に永遠の生命と大なる憐れとを賜へり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

ハリストス救世主、神の獨生の子、十字架に釘せられて、三日目に墓より復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

主よ、我等は爾甘じて我が爲に十字架を忍びし者を讚榮す、全能の救世主よ、爾に伏拜す。人を愛する主よ、我等を爾の顔より退くる勿れ、乃ち我等に聴きて、爾の復活を以て我等を救ひ給へ。

第八調 「スポタ」の大晩課 六九五

第八調 「スポタ」の大晩課 六九六

又生神女の讚頌、アモレイのパワエルの作。第四調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐れは主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

神の母よ、天の品位は爾を讚榮す、蓋爾至淨なる者は父及び聖神と偕に永在する神、意志を以て無より天使の軍を造りし主を生み給へり。正しく爾を生神女と讚め歌ふ者の靈を救ひて照さんことを彼に祈り給へ。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

女宰よ、我爾を成聖の泉、聖神に輝かざる純金の約匱として、爾の前に俯伏して祈る、慾に耽る我が不當なる靈を照し、我を惡鬼の甚しき苛虐より脱れしめて、我に蹉跎なく救の道を行かしめ給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐れは大なり、主の眞實は永く存す。

ほうざ た しよ ひら おこない あらわ かくじん おのれ おもに にな らたい まえ た
寶座は立てられ、書は披かれ、行は露れ、各人が己の重任を荷ひ、裸體にして前に立
ちて、神の憤及び其義なる審問に慄く時、女宰よ、其時我を憐みて、罪なる我を凡
の定罪と諸の苦より脱れしめ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

てん おう ひと あい よ ち あらわ ひと とも いま けだしきよ どうていじよ み と ひと
天の王は人を愛するに因りて地に現れ、人と偕に在せり、蓋淨き童貞女より身を取り、人
の性を有ちて生れし者は、二の性にて一の位ある獨一子なり。故に我等彼が實に全き
神及び全き人なるを傳へて、ハリストス吾が神を承け認む。夫を識らざる母よ、我が靈
の憐を蒙らんことを彼に祈り給へ。

次ぎて「穩なる光」、本日の提綱、「主は王たり」。其他常例の如し。

挿句に主日の讃頌、第八調。

てん くだ じゆうじか のぼ し いのち し ため きた まこと ひかり くらやみ
天より降りしイイススは十字架に上り、死せざる生命は死の爲に來り、眞の光は黑暗に
ある者に顯れ、衆人の復活は陥りし者に臨めり。我等の光及び救世主よ、光榮は爾
に歸す。

他の讃頌

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

われら し ふつかつ さんえい けだしかれ う たましい からだ くるしみ とき あい
我等は死より復活せしハリストスを讃榮す、蓋彼の受けたる靈と體とは苦の時に相
分れたり、其至淨なる靈は地獄に降りて、之を携にし、我が靈の救主の聖なる體は墓
に在りて朽壞を見ざりき。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

ハリストスよ、我等聖詠と詩賦とを以て爾の死よりの復活を讃榮す。爾は此を以て我等
を地獄の苛虐より解きて、神として永遠の生命と大なる憐とを賜へり。

第八調 「スポタ」の大晩課 六九七

第八調 「スポタ」の大晩課 六九八

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

嗚呼萬有の測り難き主宰、天地の造物主よ、爾は十字架の苦を忍びて、我に苦なき
を流せり、瘞を受け、光榮の中に復活して、全能の手を以てアダムを偕に復活せしめ給
へり。光榮は爾の三日目の復活に歸す、爾は此を以て我等に永遠の生命と諸罪の潔淨と
を賜へり、獨慈憐の主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

聘女ならぬ童貞女、言ひ難く身にて神を孕みし者、至上なる神の母よ、爾の諸僕の祈禱
を受け給へ。衆に諸罪の潔淨を予ふる純潔なる者よ、今我等の冀願を納れて、我等皆救
はれんことを祈り給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に、

主日の讃詞、第八調。

めぐみふかき しよ なんじ たか くだ みっか ほうむり う われら くるしみ と たま わ
恵深き主よ、爾は高きより降り、三日の葬を受けて、我等を苦より釋き給へり。吾
が生命と復活なる主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

我等の爲に童貞女より生れ、十字架に釘うたるるを忍び、神なるに因りて死にて死を滅
し、復活を顯しし仁慈なる主よ、爾の手にて造りし者を棄つる母れ。慈憐の主よ、爾
が人を愛する愛を顯して、我等の爲に祈禱する所の爾を生みし生神女を受け給へ、吾

きゆうしゆ のぞみ うしな ひとびと すく たま
が救主よ、望を失ひし人人を救ひ給へ。

其他、并に發放詞。

主日の早課

六段の聖詠畢りて「主は神なり」、第八調に依りて歌ひ、後主日トロバリの讚詞、「恵み深き主よ、爾は高きより降り」、二次。光榮、今も、生神女讚詞、「我等の爲に童貞女より生まれ」。次に聖詠經の常例の誦讀。

第一の誦文の後に主日の坐誦讚詞。第八調。

ばんゆう いのち なんじし ふっかつ こうめい てん し おんなたち よ なみだ とど しと
萬有の生命よ、爾死より復活せしに、光明なる天使は女等に呼べり、涙を止め、使徒
ふくいん うた よ かみ じんるい すく よみ しゆ ふっかつ たま
に福音して、歌ひて呼べ、神として人類を救はんことを嘉せしハリストス主は復活し給へり。

しゆ わ かみ お なんじ て あ くる もの なが わす なか
句、主我が神よ、起きて爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。
なんじ する ごと じつ はか ふっかつ せい おんなたち なんじ お しと つた
爾は録されし如く實に墓より復活して、聖なる女等に爾が興きたるを使徒に傳へんこ
めい たま すみやか はんじん はか はし そのうち ひかり な おどろ つつみぬの お なんじ
とを命じ給へり。速なるペトルは墓に走り、其中に光を見て驚き、裏布の置かれて、爾
しんせい からだ な み しん よ ちち ひかり かみ こうえい なんじ き
の神聖なる體の無きを見て、信じて呼べり、父の光なるハリストス神よ、光榮は爾に歸
なんじ わ きゆうしゆ ばんみん すく たま
す、爾は我が救主、萬民を救い給えばなり。

光榮、今も、生神女讚詞

われら てん もん やくひつ しせい やま ひか くも てん かけはし れいち らくえん あがない ぜんせかい
我等は天の門、約櫃、至聖なる山、光る雲、天の梯、靈智なる樂園、エワの贖、全世界
のおおい たから ほ うた けだし こ うち せかい すくい いにしえ つみ ゆるし な ゆえ われ
の大なる寶を讃め歌はん、蓋斯の中に世界の救と古の罪の赦とは成れり。故に我

第八調 主日の早課 七一五

第八調 主日の早課 七一六

ら かれ よ けいけん なんじ しせい さん ふ おが もの つみ ゆるし たま なんじ こ およ
等彼に呼ぶ、敬虔にして爾の至聖なる産を伏し拜む者に罪の赦を賜はんことを爾の子及
かみ いの たま
び神に祈り給へ。

第二の誦文の後に主日の坐誦讚詞、第八調。

きゆうせいしゆ ひとびと なんじ はか ふういん てん し いし そのもん うつ おんなたち なんじ し
救主よ、人人が爾の墓を封印せしに、天使は石を其門より移せり。女等は爾が死よ
お おい なんじ もんと なんじ ばんゆう いのち ふっかつ し かせ と
り興きたるを見て、シオンに於て爾の門徒に爾が、萬有の生命よ、復活し、死の桎梏の解
ふくいん しゆ こうえい なんじ き
かれたるを福音せり。主よ、光榮は爾に歸す。

しゆ われどころ つく なんじ ほ あ なんじ ことごと きせき つた
句、主よ、我心を盡くして爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。
ほうむり こうりょう たずさ おんなたち てん し こえ はか うち き なみだ とど かなしみ か よろこび
葬の香料を攜へし女等は天使の聲を墓の中より聞けり、涙を止め、哀に代へて喜
う うた よ かみ じんるい すく よみ しゆ ふっかつ たま
を受けて、歌ひて呼べ、神として人類を救はんことを嘉せしハリストス主は復活し給へり。

光榮、今も、生神女讚詞。坐するにあらざして、立ちて、畏と敬とを以て之を歌ふ。

おんちよう み こうむ もの およそ ぞうぶつ てん し かいおよ ひと やから なんじ よ よろこ なんじ せい
恩寵を滿ち被る者よ、凡の造物、天使の會及び人の族は爾に因りて喜ぶ。爾は聖に
みや れいち らくえん どうていじょ ほまれ かみ なんじ み と よよ さき いま われら
せられし宮、靈智なる樂園、童貞女の譽なり、神は爾より身を取り、世の先より在す我等
かみ おきなご たま けだしなんじ たい ほうざ な なんじ はら てん ひろ もの な
の神は嬰兒となり給へり、蓋爾の胎を寶座と爲し、爾の腹を天より廣き者と爲せり。
おんちよう み こうむ もの およそ ぞうぶつ なんじ よ よろこ こうえい なんじ き
恩寵を滿ち被る者よ、凡の造物は爾に因りて喜ぶ、光榮は爾に歸す。

應答歌、第八調。

けいこうじよ いのち たま しゆ はか まえ た ふし しゆさい ししや うち たず てん し
攜香女は生命を賜ふ主の墓の前に立ちて、不死なる主宰を死者の中に尋ねしに、天使より
ふくいん よろこび う しと ら つた い いかみ かみ ふっかつ せかい おおい あわれみ
福音の喜を受けて、使徒等に傳へて云へり、ハリストス神は復活して、世界に大なる憐
たま
を賜へり。

ステペンナ アンティフォン
品第詞、第八調。第一倡和詞。毎句復唱す。

わ いとけな とき てき われ いざな いつらく われ こ しゅ われただなんじ たの これ か
我が 幼き時より敵は我を誘ひ、逸樂にて我を焦がす、主よ、我唯爾を頼みて之に勝つ。
シオンを憎む者は抜かる前の草の如し、蓋ハリストスは苦しき切斷を以て彼等の首を斬

らん。 光榮
せいしん よ ほんゆう い かれ ひかり ひかり おおい かみ われら くれ ちちおよ ことば
聖神に藉りて萬有は生く、彼は光よりの光にして、大なる神なり。我等彼を父及び言
と偕に崇め歌ふ。 今も、同上。

第二 偈和詞

いた じれん しゅ ねが わ ころろ へりくだ なんじ おそ おそれ おお たか
至りて慈憐なる主よ、願はくは我が心は謙りて、爾を畏るる畏に覆はれん、高ぶり
て爾より離れ落ちざらん爲なり。
しゅ たの お もの しゅ ひ くるしみ もつ しゅう しんぼん とき おそ
主に持みを負はせたる者は、主が火と 苦とを以て衆を審判せん時に懼れざらん。

第八調 主日の早課 七一七

第八調 主日の早課 七一八

光榮

せいしん よ およそ せいしや み よげん きみょう こうしやう こと おこな さんい ゆいいち かみ うた
聖神に藉りて凡の聖者は見、預言し、奇妙に高尚なる事を行ひて、三位に唯一の神を歌
ふ、蓋神性は三光なれども獨一なり。

今も、同上。

第三 偈和詞

しゅ われなんじ よ き い よ もの なんじ みみ かたぶ われ こ と さき きよ
主よ、我爾に籲べり、聞き納れて、呼ぶ者に爾の耳を傾け、我を此より取らざる先に潔
め給へ。

おのれ はは ち かえ しゅうじん またい ざいせい とき おこな こと かな くつう あるい せんえい う
己の母たる地に歸る衆人は復出でん、在世の時に 行ひし事に適ひて苦痛或は尊榮を受
けん爲なり。 光榮

せいしん よ せいさん ゆいいちしや つた けだしちち むげん こ とき さき くれ うま
聖神に藉りて聖三の唯一者は傳へらる、蓋父は無原なり、子は時なき先に彼より生れ、
どういつ ざ どういちせい しん とも ちち かがや
同一座同一性の神は共に父より輝けり。

今も、同上。

第四 偈和詞

きやうだいむつま お ぜん かな び かな けだししゅ これ ため えいえん いのち やく
兄弟 睦しく居るは善なる哉、美なる哉、蓋主は此が爲に永遠の生命を約せり。
の ゆり よそお しゅ おのれ ころも ため おもんばか よう めい たま
野の百合花を妝ふ主は己の衣の爲に 慮るを要せずと命じ給ふ。

光榮

せいしん ほんぶつ へいあん たも ゆいいち げんいん けだしかれ かみ ちちおよ こ いったい
聖神は萬物の平安に保たるる唯一の原因なり、蓋彼は神なり、父及び子と一體にして、
どうさいせい しゅ
同宰制の主なり。 今も、同上。

提綱、第八調。

しゅ えいえん おう なんじ かみ よよ おう
主は永遠に王とならん、シオンよ、爾の神は世々に王とならん。句、我が 靈よ、主を讃
めあげよ。我生ける中主を讃め揚げん。

次に「凡そ呼吸ある者」。主日の早課の福音經。「ハリストスの復活を見て」。第五十聖詠。
及び其他次第に循ふ。

主日の規程、第八調。

第一 歌頌

イルモス、昔奇跡を行ふモイセイの杖は、十字形に撃ちて、海を分ち、車に乗りて追
きた しず のが かみ ほ うた もの すく たま
ひ來るファラオンを沈め、徒歩にて逃るイズライリ、神を讃め歌ふ者を救ひ給へり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

われら いかん ぜんろう しんせい き かれ くるしみ しゅうしんじや くるしみ く
我等如何ぞハリストスの全能の神性を奇とせざらん、彼は 苦より衆信者に 苦なきと朽

ちざるとを流し、聖なる脇より不死の泉を滴らせ、墓より永遠の生命を施し給ふ。

第八調 主日の早課 七一九

第八調 主日の早課 七二〇

天使は今女等に如何にか美しき者と現れたる、彼は本性の無形の潔淨の光明なる形を具へ、其姿を以て復活の光を示して呼べり、主は復活し給へり。

生神女讃詞

神言を腹に容れて貞潔を守りし生神女マリヤよ、爾に於て至榮なる事は世世の中に唱へられたり。故に我等皆爾神の亞に我が保護者たる者を尊む。

又十字架復活の規程

イルモス、「イブライリは乾ける地の如く水を過り」。

萬有の性に超ゆる高き者が最下なる處に降りしを見て、苦痛の門は擧げられ、地獄の門衛は懼れたり。

天使の品位は墜ちたる人の性、地の最下なる處に閉されし者が父の寶座に坐せしめられたるを見て驚きたり。

生神女讃詞

聘女ならぬ母よ、天使の品位及び人人の會は絶えず爾を崇め讃む、爾は彼等の造成主を赤子として爾の手に抱きたればなり。

又至聖なる生神女の規程

イルモス、「我等其民をして紅の海を過らせし主に歌はん」。

身を取りし永在なる神の言を性に超えて生みたる至淨なる生神女よ、我等爾を歌ふ。ハリストスよ、童貞女は爾生を施す葡萄の房、全世界の救の甘味を滴らす者を生み給へり。

生神女よ、アダムの族、爾に因りて智慧に超ゆる福樂に上せられたる者は、宜しきに合ひて爾を讚榮す。

共頌、「我が口を開きて」。

第三歌頌

イルモス、始に智慧にて天を堅め、地を水の上に建てしハリストスよ、爾が誠の石に我を堅め給へ、爾獨人を慈む主の外に聖なる者なければなり。

ハリストスよ、食ふ罪に因りて定罪せられしアダムの、爾は己の身の救を施す苦を以て義と爲し給へり、蓋罪なき主よ、爾親ら死の試に屬せざりき。

吾が神イイススは幽暗に居り死の蔭に坐する者に復活の光を輝かし、己の神性を以て強き者を縛りて、其器を劫し給へり。

生神女讃詞

無玷なる生神女よ、爾はヘルウィム及びセラフィムより上なる者と顯れたり、蓋爾はひとりいがたかみおのれはらうたまゆえわれらしゆうしんじやうたもつなんじいさぎよものさんよう獨容れ難き神を己の腹に受け給へり。故に我等衆信者は歌を以て爾潔き者を讚揚す。

第八調 主日の早課 七二一

第八調 主日の早課 七二二

又イルモス、「主、天の穹蒼の至上なる造成者」。

主よ、爾は先に我誠に背きし者を逐ひて、爾より退けたり、今我が形を受けて、我に順從を教へて、十字架に釘せらるるを以て復我を己に就かしめ給へり。

睿智を以て一切を預知し、智慧を以て地獄を設けし主神の言よ、爾は己の像に循ひて造

りし者に爾の寛容に因りて復活するを獲しめ給へり。

生神女讃詞

ひとりひと あい しゅ なんじ どうていじょ い にくたい もつ み よろ ごと おのれ ひとびと あらわ
獨人を愛する主よ、爾は童貞女に入りて、肉體を以て見るに宜しきが如く己を人人に現
し、且彼を眞の生神女及び信者の扶助者と爲し給へり。

又 イルモス、「主よ、爾は爾に趨り附く者の固」。

じゅんけつ もの なんじ きとう もつ われら たすけ あた われら かこ しよてき こうげき ふせ たま
純潔なる者よ、爾の祈祷を以て我等に援助を與へて、我等を圍む諸敵の攻撃を防ぎ給へ。
しょうしんじょ なんじ せかい ため いのち かしら う げんぼ あらため な たま
生神女よ、爾は世界の爲に生命の首たるハリストスを生みて、原母エワの更新と爲り給
へり。
ちち じつざい ちから まこと かみ み う じゅんけつ もの われ ちから お たま
父の實在の力たる眞の神を身にて生みし純潔なる者よ、我に力を帯ばしめ給へ。

第四歌頌

イルモス、主よ、爾は私の固、私の力なり、爾は私の神、私の喜なり、爾は父の懐
を離れずして、我等の貧しきに臨み給へり。故に預言者アウワクムと共に爾に呼ぶ、人
を慈む主よ、光榮は爾の力に歸す。
じれん きゆうせいしゅ なんじ てき われ はなはだあい なんじ おどろ へりくだり もつ ち のぞ
慈憐なる救世主よ、爾は敵なる我を甚愛せり。爾は驚くべき謙遜を以て地に臨み、
わ しごく ぼうぎやく じ なんじ しじょう こうえい たかき いま われかつ はずか もの えい
我が至極の暴虐を辭せず、爾の至淨なる光榮の高に在して、我嘗て辱しめられし者を榮
し給へり。
しゅさい たれ いまくるしみ し ほろぼ じゅうじか きゅうかい とお し じごく たから
主宰よ、誰か今苦にて死の滅され、十字架にて朽壞の遠ざけられ、死にて地獄の寶
の奪はるるを見て驚かざらん。人を愛する主よ、爾十字架に釘せられし者の神聖なる力
にて行はれしことは奇異なる哉。

生神女讃詞

よめ よめ なんじ しんじや ほまれ なんじ ら てんたつ かくれが かき
聘女ならぬ聘女よ、爾は信者の譽なり、爾は「ハリストティアノン」等の轉達と避所、城垣
と港なり。蓋爾は、純潔なる者よ、爾の子に祈祷を獻げて、信と愛とを以て爾を潔
き生神女と承け認むる者を苦難より救ひ給ふ。

又 イルモス、「主よ、我爾が攝理の秘密を聆き」。

ハリストス神よ、法に戻る者の諸子は爾を十字架に釘せり。爾は此を以て、慈憐の主
第八調 主日の早課 七二三
第八調 主日の早課 七二四

として、爾の苦を讚榮する者を救ひ給へり。
なんじ ほか ふうかつ およ じごく あ ししや おのれ とも ふうかつ じれん しゅ なんじ
爾は墓より復活して、凡そ地獄に在る死者を己と偕に復活せしめ、慈憐なる主として、爾
の復活を讚榮する者を照し給へり。

生神女讃詞

至淨なるマリヤよ、爾が生みし神に爾の諸僕に諸罪の赦を賜はんことを祈り給へ。

又 イルモス同上

いのち ほどこ ほ せかい えいせい あた もの しょう たがえ た しょうしんじょ なんじ うた もの
生命を施す穂、世界に永生を與ふる者を生ぜし耕されざる田なる生神女よ、爾を歌ふ者
を救ひ給へ。
じゅんけつ えいていどうじょ われら てら もの みななんじ しょうしんじょ つた なんじ ぎ ひ う
純潔なる永貞童女よ、我等照されたる者は皆爾を生神女と傳ふ、爾は義の日を生みた
ればなり。
かみ つみ しゅ なんじ う もの きとう よ われら わち きよめ なんじ せかい
神よ、罪なき主として、爾を生みし者の祈祷に藉りて、我等の無知に潔淨を、爾の世界
に平安を與へ給へ。

第五歌頌

イルモス、隠れざる光よ、何ぞ我を爾の顔より退けし、外の闇は憐なる我を掩へり。祈る、我を返して、我が途を爾の誠の光に向はしめ給へ。

ハリストス救世主よ、爾は辱しめられて、苦の前に絳袍を衣せらるるを忍びて、始に造られし者の醜き裸を掩ひ、裸なる身にて十字架に釘せられて、死の衣を脱ぎ給へり。

ハリストスよ、爾は復活して、我が墜ちたる性を死に屬する塵より改め作り、之を老いざる者と爲し、之を復王の像として不朽の生命にて輝く者と顯し給へり。

生神女讃詞

純潔なるものよ、求む、爾の子の前に母の勇敢を有つ者として、我等の爲に同族に適ふ慮を爲すを厭ふ勿れ、我等信者は獨爾を慈憐なる轉達者として主宰に進むればなり。

又 イルモス、「主よ、爾の誠を以て我等を照せ」。

仁愛なるハリストスよ、我等爾の前に俯伏す、爾の十字架の力を以て我等を導きて、此を以て我等に平安を與へ給へ。

仁慈仁愛なる神よ、我等爾の復活を歌ふ者の生命を司りて、我等に平安を與へ給へ。

生神女讃詞

婚姻に與らざる至淨なるマリヤよ、爾の子我が神に我等信者に大なる憐を降さんことを祈り給へ。

第八調 主日の早課 七二五

第八調 主日の早課 七二六

又 イルモス、「主よ、我等夙に興きて爾に籲ぶ」。

嚮導者及び主たる神を生みし者よ、我が諸慾の耐へ難き暴風を鎮め給へ。

至淨なる生神女よ、天使の品位及び人人の會は爾の産に奉事す。

聘女ならぬ聘女、生神女マリヤよ、諸敵の謀を虚しくして、爾を歌ふ者を樂しましめ給へ。

第六歌頌

イルモス、救世主よ、我を淨め給へ、我が不法多ければなり、祈る、我を惡の淵より引き上げ給へ、我爾に呼びたればなり、吾が救の神よ、我に聽き給へ。

ハリストスよ、惡の魁は木を以て厲しく我を墮したれども、爾は十字架に上りて、更に厲しく彼を墮し、辱しめて、陥りし者を復活せしめ給へり。

ハリストスよ、爾は墓より輝き出でて、憐をシオンに垂れ、慈憐なるに因りて、爾が神聖なる血を以て、其舊を易へて之を新にし、今其中に於て世世の王と爲り給へり。

生神女讃詞

潔き神の母よ、願はくは我等は爾の祈禱に因りて甚しき罪惡より脱れて、爾至淨の者より言ひ難く人體を取り給ひし神の子の神聖なる光照を受けん。

又 イルモス、「我禱を主の前に灌ぎ」。

ハリストスよ、爾は手を十字架に伸べて、始めて造られし者のエデムに於て不節制に伸べたる手を醫し、甘じて膽を嘗めて、全能の主として、爾の苦を讚榮する者を救ひ給へり。

贖罪主ハリストスは死を嘗めて、古の定罪と朽壞との國を破り、地獄に降りし後復活して、全能の主として、其復活を歌ふ者を救ひ給へり。

生神女讃詞

至浄なる生神童貞女よ、我等の爲に絶えず祈り給へ、爾は信者の保固なればなり。我等爾を待むに因りて堅く立ちて、愛を以て爾及び爾より言ひ難く身を取りし主を讃榮す。

又 イルモス、「光を衣の如く衣る」。

生神女よ、我等信者は爾を神の宮及び約匱、生ける殿及び天の門として傳ふ。神の聘女マリヤよ、神として邪宗を滅す者と爲りし爾の産は父及び聖神と偕に伏拜せらる。生神女よ、神の言は爾を地上の者の爲に天の梯として示し給へり、爾に縁りて我等に降りたればなり。

小讃詞、第八調。

第八調 主日の早課 七二七

第八調 主日の早課 七二八

大仁慈なる主よ、爾は墓より復活して、死せし者を興し、アダムを復活せしめ給へり。エウは爾の復活を楽しみ、世界の極は爾が死より興きたるを祝ふ。

同讃詞

地獄の國を擲にし、死者を復活せしめし恒忍なる救世主よ、爾は攜香女に逢ひて、之に哀に易へて喜を賜へり。生命を施す仁慈愛なる主よ、爾は使徒に勝利の記號を示して、造物を照し給へり。故に世界は爾が死より興きたるを祝ふ。

第七歌頌

イルモス、昔ワフィロンに於て火は神の降臨に慙ぢたり、故に少者は爐に在りて、花園に歩むが如く祝ひて歌へり、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。ハリストスよ、爾の光榮なる謙虚、爾が貧窮の神妙なる富は諸天使を驚かす、彼等は、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらると、信じて呼ぶ者を救はん爲に、爾が十字架に釘せらるるを見ればなり。爾は神聖なる降臨にて地獄に光を満たしに、曾て蔽ひたる闇冥は逐はれたり。故に古世よりの囚人は復活して呼ぶ、吾が先祖の神は崇め讃めらる。

聖三者讃詞

我等は爾萬有の主、唯一の獨生の子の唯一の父を正しく傳へ、又爾より出づる唯一の義なる神、爾と同一性同永在なる者を承け認む。

又 イルモス、「昔ワフィロンに於てイウデヤより」。

神よ、爾は、預言者の言ひし如く、救を全地の中に爲せり、蓋爾は木に擧げられて、信を以て、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらると呼ぶ衆人を召し給へり。洪恩なる主よ、爾は寢よりするが如く墓より復活して、衆人を朽壞より救ひ給へり、使徒等は復活を傳へて造物に之を信ぜしむ。我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

生神女讃詞

生みし者し同功、同能、同永在なる言は童貞女の胎内に、父及び聖神の善旨に由りて、形づくらる。わが先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

又 イルモス同上

爾は童貞女の胎より身を取りて、我等の救の爲に現れ給へり。故に我等は爾の母を生神女と識りて、正しく呼ぶ、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

至福なる童貞女よ、爾はイエッセイの根より枝を生ぜり、是れ信を以て爾の子に、
我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらると呼ぶ者の爲に救の花を開きて果を結ぶ者なり。

第八調 主日の早課 七二九

第八調 主日の早課 七三〇

至上者の實在なる睿智よ、信を以て爾に、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらると歌ふ衆人
を、生神女に藉りて睿智と神聖なる力とに満て給へ。

第八歌頌

イルモス、ハルデヤの窘迫者は怒に堪へずして、敬虔の者の爲に爐を七倍熱くしたれど
も、上の力にて其救はれしを見て、造物主と救世主に呼べり、少者よ、崇め讃めよ、司祭
よ、讃め歌へ、民よ、萬世に尊み崇めよ。

イイススの神性の至りて神妙なる力は神に合ふが如く我等の中に輝けり、彼衆人の爲
に身にて十字架の死を嘗めて、地獄の堅堡を破りたればなり。少者よ、常に彼を崇め讃
めよ、司祭よ、讃め歌へ、民よ、萬世に尊み崇めよ。

釘せられし者は起き、高ぶる者は倒れ、陥りて破られたる者は改められ、朽壞は除か
れ、不朽は華さけり、死に屬する事が生命に吞まれたればなり。少者よ、崇め讃めよ、司祭
よ、讃め歌へ、民よ、萬世に尊み崇めよ。

聖三者讃詞

三光の神性、惟一の光明にて輝く者、三位一體の神、無原の父、父と一性の言、及び共
に王たる一性の聖神を、少者よ、崇め讃めよ、司祭よ、讃め歌へ、民よ、萬世に尊み崇
めよ。

又 イルモス、「爾の誠に熱中せし少者は」。

木の上在りて手を我裸體にせられし者に舒べ、我を召して、己の美しき裸體にて温
めんと欲する主を、悉くの主の造物は崇め讃めて、世世に彼を讃め揚げよ。

我陥りし者を最下なる地獄より擧げて、父の高き寶座に坐せしむめ光榮を以て尊くせし
主を、悉くの主の造物は崇め讃めて、世世に彼を讃め揚げよ。

生神女讃詞

童貞女よ、爾は陥りしアダムの女にして、我が性を新にせし神の母と現れたり。我
等悉くの造物は彼を主として歌ひて、萬世に讃め揚ぐ。

又 イルモス、「天使の軍の歌ふ所の天の王」。

生神女よ、諸敵の我等に向ひて射る焰の状なる燃ゆる矢を滅し給へ、我等が萬世に爾
を歌はん爲なり。

童貞女よ、爾は性に超えて造成主及び救主たる神言を生み給へり。故に我等爾を歌ひ
て、萬世に讃め揚ぐ。

童貞女よ、爾の内に入りたる近づき難き光は爾を萬世の爲に金光を放つ光明なる燈
と爲し給へり。

第八調 主日の早課 七三一

第八調 主日の早課 七三二

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、附唱と共に、「ヘルウィムより尊く」。

第九歌頌

イルモス、天は懼れ、地の極は驚けり、神は身にて人人に現れ、爾の腹は天より廣き者

と爲りたればなり、故に天使と人人の群は爾生神女を崇め讃む。
神の言よ、爾は神の無原なる性にて單一なる者にして、肉體を受くるに因りて合せられたる者と爲り、人としては苦を受け、神としては苦に與らざる者と止まり給へり。故に我等爾を分離なく混淆なき二性を有つ者として崇め讃む。
至上なる主よ、爾は諸僕に降り、其性を以て人と爲りしに因りて、己の本性の父を神と名づけ、墓より復活して、地に生るる者の爲に本性の神及び主宰を恩寵の父と爲し給へり。我等衆彼と偕に爾を崇め讃む。

生神女讃詞

嗚呼童貞女、神の母よ、爾は天然の法に超ゆる者と顯れて、仁慈なる父が萬世の先に生みし神言を身に生み給へり。彼は肉體を衣たれども、我等は今彼を悉くの肉體より至りて上なる者と承け認む。

又 イルモス、「凡の者は神の言ひ難き寛容の事」。

我等爾を本性の神の子、生神女の胎内に孕まれて、我等の爲に人と爲りし者と承け認め、爾が人の性にて十字架に苦を受くるを見て、神として苦に與らざる者と崇め讃む。古の幽暗は破られたり、蓋地獄より義の日ハリストスは光を放ちて出で、地の四極を照し、天の人・地の神として神性の光明を以て輝き給ふ。我等彼を二性に於て崇め讃む。

生神女讃詞

生神女の子よ、弓を執り、矢を放ちて、我等を滅さんと謀る敵を斃し給へ。爾の十字架を我等の爲に諸敵に勝たれぬ武器と爲して、我等の皇帝に勝利を賜へ。

又 イルモス、「潔き童貞女よ、我等爾に依りて」。

童貞女よ、爾の記憶は、爾に趨り附きて、敬虔に爾を生神女と承け認むる者を喜と樂とに満てて、彼等に醫治を流す。
恩寵を蒙れる者よ、我等聖詠を以て爾を歌頌して、黙すなく爾に呼ぶ、慶べ、蓋爾は衆人に喜を流し給へり。
生神女よ、爾は最美しき果を結び、是れ信を以て爾を讃め揚ぐる者に朽壞にあらずして生を施す者なり。

第八調 主日の早課 七三三

第八調 主日の早課 七三四

カタワシヤ

エクサボスティライ

共頌の後に小聯禱。次ぎて主我等の神は聖なり。其後 差遣詞。

スティヒラ

「凡そ呼吸ある者」に主日の讃頌、第八調。

句、彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。
主よ、爾は審判座の前に立ちて、ピラトより審判せられたれども、父と偕に坐して、寶座を離れざりき、死より復活して、世界を敵の奴隷より釋き給へり、慈憐にして人を愛する主なればなり。

句、神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。
主よ、爾は悪魔に勝つ武器として我等に爾の十字架を賜へり、蓋彼は戦ひ慄きて、其力を見るに忍びず、其死者を起し、死を空しくしたればなり。故に我等爾の葬と復活とを伏し拜む。

句、其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。
主よ、イウデヤ人は爾を死者の如く墓に藏められたれども、兵卒は寝ぬる王の如く爾を守れ

り、生命の寶の如く印を以て封じたれども、爾は復活して、我等の靈に不朽を賜へり。

句、角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

主よ、復活を傳へし爾の天使は番兵を恐れしめ、女等と呼びて云へり、何ぞ生ける者を死者の中に尋ぬる、彼は神として復活し、世界に生命を賜へり。

又讃頌、アナトリーの作。同調。

句、鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

仁愛なるハリストス神よ、爾は神性にては苦に與らざる者にして、十字架の苦を忍びて、三日の葬を受け給へり、我等を敵の奴隷より釋き、爾の復活に因りて、我等に生命を賜ひて、我等を不死の者と爲さん爲なり。

句、和聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

ハリストスよ、我爾が墓よりの復活に伏拜し、之を讃榮して歌頌す、爾は之を以て我等を地獄の解き難き械より釋き、神として世界に永遠の生命と大なる憐とを賜へり。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる毋れ。

法に悖る民は其時爾が生命を受けたる墓を守り、番兵を置きて封印したれども、爾は不死なる全能の神として三日目に復活し給へり。

句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

主よ、爾は地獄の門に至りて之を破りしに、囚囚は斯く呼べり、此れ誰ぞや、如何

第八調 主日の早課 七三五

第八調 主日の聖體禮儀 七三六

ぞ地の最下なる處に繋がれずして、反りて幕の如く死の獄を破りたる、我は彼を死者として受けて、神として慄く。全能の主よ、我等を憐み給へ。

光榮、福音の讃頌。今も、生神女讃詞、「生神童貞女よ、爾は至りて讃美たる者なり」。

大詠頌。

次ぎて復活の讃詞。

主よ、爾は墓より復活して、地獄の鎖を壊り、死の定罪を滅し、衆人を敵の網より救へり。獨大慈憐なる者よ、爾は使徒に顯れて、彼等を傳教に遣し、彼等に依りて爾の平安を世界に賜へり。

次ぎて聯禱、及び發放詞。